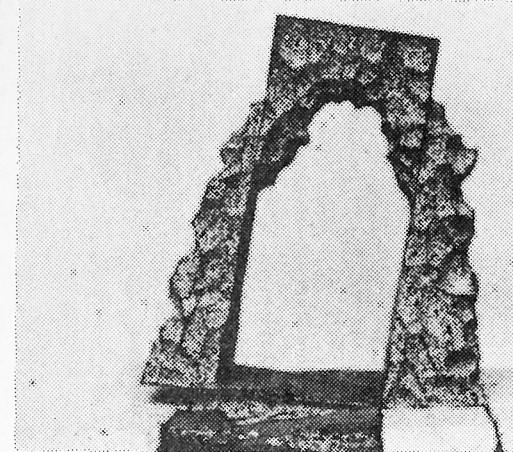


(9) 文化 1版 1986年(昭和61年)6月1日 曜日

中絶タイムス



丸山映「空白のかたち」



丸山映展
画廊「匠」が新
装なっての第一回展。その白
い壁を背景とした黒い石の彫
刻展は、気品のある透徹した
霧廻氣をもって見えたえるあ
るものとなった。

作品は四つの傾向に分かれ
る。まず、ゆるやかなカーブ
をもって起立する「肖像のシ
リーズ」。これはいわば従来
の形や量をみせる彫刻とかわ
らないが、次の「風景のかた
ちシリーズ」となると棒状の
御影石はまるで鉄パイプのよ
うに九〇度ないしは一八〇度
折り曲げられる形状を示し、
柱は、御影の削り放しの白と
磨きあげた黒のトーンによつ

て、台との接触部が弱められ
は異質な四角の枠がはめこま
れでいる錯覚を示して、量の
表示というよりは絵画的トリ
ックへと近づく。最後のが「円
柱のシリーズ」。半円に近い
カーブを示して立っている円
柱は、御影の削り放しの白と
空虚に浮かぶような錯覚が意
図されている。



<5月>

稲嶺 成祚

気品と透徹した霧廻氣

丸山 映展